

「ローゼンクラッツのユーザーを訪ねる」

植村良彰

さん

(京都府在住)



植村さんのオーディオルームは「方向性」や「気流」を含めたカイザー理論の集大成である

ローゼンクラッツのこだわりのひとつが、「方向性」だ。第2回の最後に学んだように、地球の重力でインシュレーター(金属)の方向性が決まる。木は生えている方向に振動が走るという、目からウロコのカイザー理論を披露。今回は「方向性」の実践編として、京都のユーザーさんを訪ねることにした。それもオーディオルームのリフォームという大仕事を、貝崎チームの鍛え上げたチューニングのワザで完成させたもの。どんなすごい音がするのか。聴き慣れたCDをもって新幹線に飛び乗ったのはいうまでもない。

●レポート: 林 正儀
Masanori Hayashi



植村さんのリスニングルーム。8畳洋間と8畳和室を合体させてリフォームしている。タンノイのカンタベリー等、オーディオ機器が設置されている床面に「サウンドフロア」を、前面の壁には「志賀高原原木杉オーディオ壁」を、通常空間の床はコルク材として、全て音の走る方向に揃えられている

演奏もたしなむ植村さんが
念願のリフォームを実現

穏やかな笑顔で迎えてくれたのは、植村良彰さんだ。15年来のユーザーだそう、クラシックやブルグラスなど熱心な音楽愛好家。愛聴盤(LP)がミュージック/ボストンの「悲愴」や「幻想」と聞いて、思わず握手してしまった。「私と同じだ……!」。それならタンノイや真空管アンプを好まれることもわかる。部屋にはビクターの蓄音機もあり、隣室のソフト部屋にはクルマー台分くらいしそうな高価なヴァイオリンが……。小学生のころから続けられていたようで、演奏もたしなむ趣味人とお見受した。身内の方が住んでいた隣の家を譲り受けたことで、念願のリフォームとなったわけだ。

ライフスタイルをくずさない中で
カイザー流の室内音響に仕上げる

「8畳洋間と8畳和室を合体させるオーディオルーム・リフォーム」としてWEB公開されているので参考にされるとよいが、5月に完成したばかりのピカピカで、木の香りと適度な響きを持つ心地よさ。声のヌケがよく、会話のしやすさがまず第一印象だった。

部屋の感じはふつうのリビング風だ。窓が二重になっているくらいで、ライフスタイルをくずさない中で、方向性や長さ、あるいは材料の組み合わせによって最高の室内音響に仕上げてみせる。メーカーの試聴室っぽくないところがカイザー流だと思う。

天井の梁を継ぎ足して
音のバランスを整える

「方向性」とは、言い換えれば音が走る方向のこと。響きや振動がどちらへ向かって流れるのかということだろう。私も最近わかってきたが、ステージの中央で歌ったとすると、その声がセンターから左右へふわっと広がる。またステージから手前方向に声が伝わってくるのが自然現象というもの。ステレオ再生の場合も同じで、部屋作りでもこのルールに従えばよいのだと思う。「その通り!」と、貝崎さんがうなづく気がした。

ではどこに「方向性」などの秘伝が生かされているのか? 主なポイントを見ていこう。いっぺんに手がけたのが、天井だったそうだ。「剥がしてみると、梁の形が右壁へ向かって「コ」の字で開いていました。これじゃあ、音が右に逃げるんですよ。見上げると改良

後の梁は何ともユニークな「Tの字」になり、「十字」のジョイントも付き、波模様のザグリまで入っている。振動促進材らしい。どんな音楽表現にも対応できる組み合わせを仕込んだわけだ。

■「サウンドフロア」を床に設置
両サイドに振動が走るよう
木目を組み合わせている

ここが決まると、ようやく床対策である。ひとつがタンノイ・カンタベリーを支えるステージのような「サウンドフロア」だ。欧州のホール等で用いられる、フランスパイン材を採用。背後には「志賀高原原木杉オーディオ壁」も見える。どちらも東京のカイザールームにあった必須アイテムだが、材料をふんだんに使い、かなりグレドアップされている模様だ。まず「サウンドフロア」は大きい。前後231センチ(2・2カイザー)もあり、奥にラックが乗っても前側に広いスペースができる。ちなみに以前は、ラックを右サイドに設置されていたそうだ。下には米松のネダが敷いてある(横並び)のだが、縦並びのバイン材はというと、中央から両サイドに振動が走るよう木目を組み合わせていた。



カイザーゲージ(音を測る物差し)で説明するカイザーサウンドの貝崎代表。「サウンドフロア」は前後231cm(2.2カイザー)あり、両サイドに振動が走るような組み合わせにて加速度組み立てを施している



前面に設置された「志賀高原原木杉オーディオ壁」。直径50cmほどの1本の原木から年輪の順番に従い戸籍管理をしたうえで裁断。写真から木の節の部分がきれいに連続している様子がわかる

天井の梁はこの部屋にもともとあったもの。左右のバランスが悪かったので、継ぎ足すことで音の左右の流れを整えている

普通にやると、ただ片流れになるだけなのだ。そして、中央部の小さな隙間は、音がこもらないためのも。ここまでやるかという配慮に感嘆した。

◆「志賀高原原木杉オーディオ壁」を前面に設置

◆1本の原木から年輪の順番に従い戸籍管理をしたうえで裁断・設置

一方スピーカーの背面に貼る杉の板は、直径50センチほどの1本の原木から年輪の順番に従って、しっかりと戸籍管理をしたうえで裁断・設置をしたそうだ。

その上部にはシックなコルク材が、傾斜をもたせて設置してあり、ホールのような雰囲気だ。床材も同じコルクで、木質が柔らかいため吸収と反射がよいところでバランスする。リビングとして落ち着いた感じに仕上がっていた。

◆チューニング&試聴編

◆ヴァイオリン演奏も披露
しなやかでコクのある美音

響きもきれいだし、これで植村

さんが満足しないわけがない。早速ヴァイオリン演奏を披露していただく、ヌケがよくとてもしなやかでコクのある美音である。「自分の音と思えないほど、ここで弾くとよく鳴るんですよ」。

◆全ての音がよく
タイミングがピタッと揃う

この部屋にはサウンド・リボルバーやストリーム・リバイバーがセットされ、音場ラックはもちろんだが、電源タップのナイアガラや各種ケーブル類、インシュレーターなどローゼンクランツの製品で統一され、完璧にチューニングされていた。



出るところか、リスナーの耳と心にダイレクトに届くのだ。

オペラでは「カルメン」だが、これもオーケストラピットから豊かなハーモニーが立ちのぼるよう、ステージがリアルにそこにある。声も七色に変化して、妖艶なカルメンウオーグが見えるようだ。植村さんも思わずうなずいていた。全ての音の走りがよくタイミングがピタッと揃うから、はせみきたの和太鼓が、鳥肌の立つように瞬

発力で立ち上がる。篠笛の鋭い響きがさえ渡り、11種をひとりで叩いていると思えない立体的定位もサイコーだ。

ジャズではビッグバンドの風通しがよく、同じホーンセクションでも、さまざまな音色と鳴り方の違いがわかりやすくなった。ドラムスもベースもリアルで存在感があり、カウント・ベイシの福島ライヴは、ここまで熱くパワフルだったのかと嬉しくなった。

今回は、新作のスピーカーアタックメント「カイザーショック」の劇的な効果など体験する余裕をあまりもてなかったが、それは後日の楽しみとしよう。

◆絶大な満足感を得たひとときで少しも疲れずリラックスできた

最後のアナログLPまで、全て気持ちよくなるときには高揚しつつ聴き終えて、絶大な満足感を得たひとときであった。かなりの長時間な

のに、少しも疲れることがなくリラックスができた。心を開放することができたのは、オーディオである植村さんのお人柄であろう。植村さんのこのオーディオルームは「方向性」や「気流」を含めた



長時間の試聴取材にも少しも疲れることなくリラックスできたという筆者。その理由はこの部屋環境とオーナーである植村さんのお人柄によるものであるのは間違いない

カイザー理論の集大成だと思えば、渾身の芸術作品だ。「この素晴らしい環境で、アンサンブルなど仲間とナマ録を楽しまれてはいかがですか？」ということばを残し、私は長岡京をあとにした。

◆イベント情報

11月29日(土)に
ローゼンクランツ試聴会を開催

講師に林正儀氏を迎え、
本連載に沿った講演を行います

■場所：オーディオユニオン 御茶ノ水 アクセサリー館
東京都千代田区神田駿河台2-2-1 4F
TEL：03-3295-3103

■時間：14:00-16:00



部屋全体の気流をコントロールする「Stream Reviver」も設置している



乱気流を吸い込み拡散する「Sound Revolver」も愛用



タンノイのカンタベリーには同社のインシュレーター「PB-Big2」を設置



アナログプレーヤーにはスタビライザー「STB-DAIBUTSU」とアナログディスクインシュレーター「PB-LOTUS(蓮)」を設置



植村さんがヴァイオリン演奏を披露。「自分の音と思えないほど、ここで弾くとよく鳴るんですよ」とご本人談